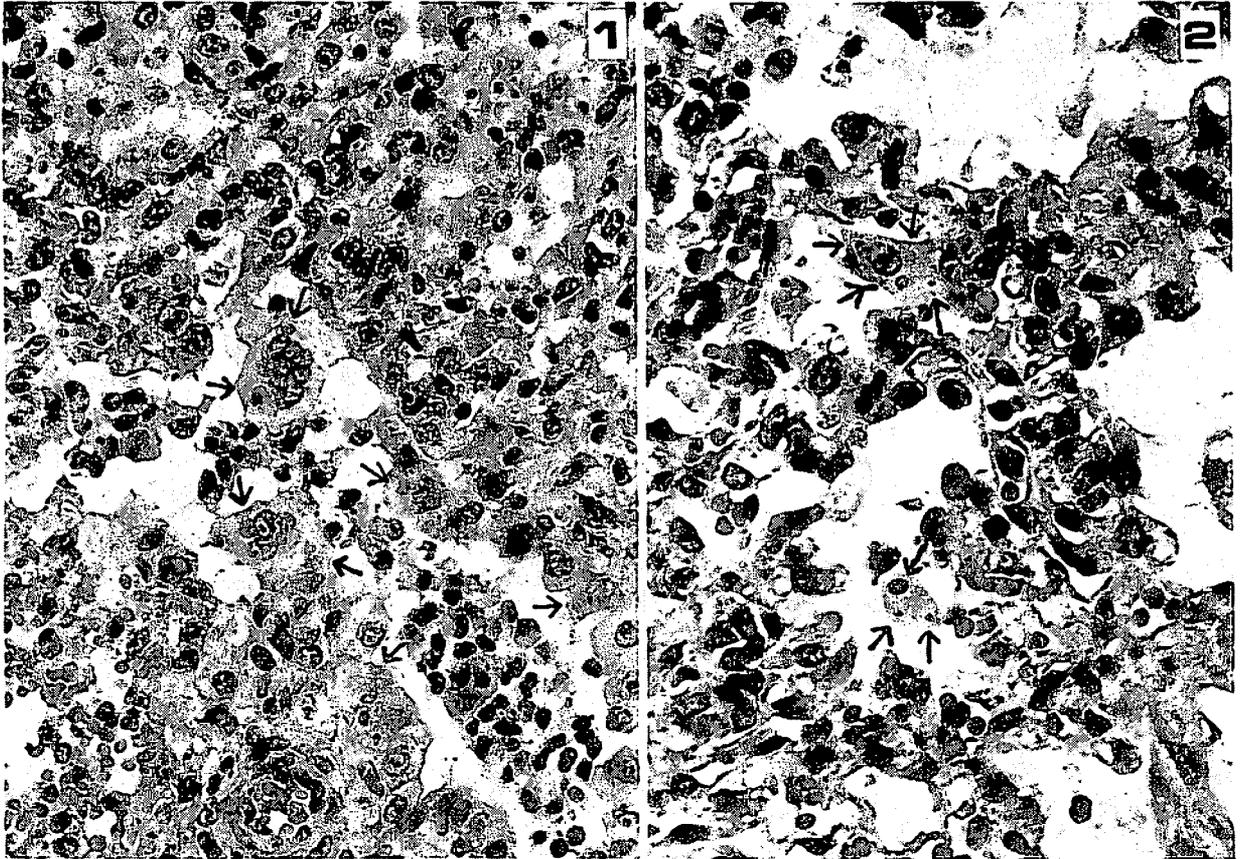


仔牛のパラインフルエンザ (?) - 肺炎

北海道大学獣医学部比較病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本No.250



仔牛は、北海道U牧場で飼育されていた、1ヵ月齢の牡ホルスタイン種で、1971年8月、同牧場で殺処分された。剖検者に依れば、仔牛は、生前、ミルク以外の飼料を摂取せず、削瘦し、41.0°Cの体温を示し、発咳頻りだった、という。剖検で、両側肺尖葉の肺炎（繊維索性肺炎と記録されているが…）の他に、肝の腫大が見られたという。この肺尖葉の一部がホルマリン液固定で持参された。

肺の組織所見概要：

(1) 繊維索性胸膜炎 胸膜表層ないし表面に繊維素滲出、大食細胞を混ざる。胸膜水腫性、間葉系細胞活性化、小さいし細小血管の壁の水腫性-疎性化性膨化(Microvascular alteration)。

(2) 上皮細胞増殖性細気管支炎 (Fig. 1, H-E) ならびにカタル性細気管支炎 (Fig. 1) 肺細管を含め、気管支系の上皮細胞は、時折ミトーゼを、そしてまた時折多核巨細胞化を示しながら、生き活きとした増殖（動的活性化）を表わす。上皮細胞は、時折、単或は複数の、大小の弱好酸性細胞質封入体 (Fig. 1, 矢印) を持つ。封入体のあるものは時に微細空胞性内部構造を示す。気管支系は内腔に変性好中球、変性剝離上皮細胞、ならびに時折繊維素を容れる。

(3) 上皮細胞増殖性肺炎 (Fig. 1) ならびに繊維索性肺炎 肺胞上皮細胞の動的活性化顕著。この像は上

述気管支系上皮におけるそれと本質的に同じ。勿論封入体も、明らかなものとしては時折という遭遇頻度ではあるが（併し細視によってかなりの遭遇頻度ではあるが）、観察される (Fig. 2, H-E, 矢印)。肺胞腔は概して比較的多量の繊維素と、少数の変性剝離上皮細胞を容れる；好中球は非常に少ない。肺胞腔はまた少量の漿液を容れることもある。

(4) 間質 充血強し。静脈性ならびに動脈性繊維素血栓形成。間葉系細胞活性化。主として囲管性に軽度の円形細胞（形質細胞）浸潤。

考察：

肺の組織像の基盤は上皮細胞増殖性細気管支炎ならびに肺胞上皮細胞増殖性肺炎 (Alveolarzellenpneumonie) である、と分析視するのが妥当であろう。また封入体肺炎 (Inclusion body pneumonia) と見てもよからうかと思う。このような肺炎像はジステンパー-肺炎のそれに酷似する。仔牛でパラミクソウイルスと云えば、まずパラインフルエンザウイルスが思い浮ぶ。かくして、この仔牛の肺の基盤病変をパラインフルエンザウイルス感染と結びつけて考えて見たくなる、というところ。繊維索性炎ならびにカタル性炎は二次的病変、と考えるのが妥当と思う。

診断：

パラインフルエンザ (?) - 肺炎